

JICA—善隣プロジェクトの現状報告

五月の寧夏^{ねい}平原^かから

村 瀬 廣 (協会理事)



塞上の江南(辺境の江南)

寧夏回族自治区ははるか西から流れてきた黄河が甘肅省・蘭州附近でぐっと北に向きを変えた、その先にある。名前にとおりイスラムを信仰する「回族」が630万人、自治区人口の35%を占める。もっとも漢族が64%と多数だが。回族は農村部に多く、「我が村は70%が回族だ」という村が多い。回族は西域民族がルーツとされるが、今では顔は漢族と見分けがつかない。しかし、集落ごとにモスクがそびえ立つ。

およそ1000年前、チベット系タングート族がここで西夏という国を建てたが、やがて元朝に滅ぼされた。寧夏という呼び方は「西夏を平定、永遠の安寧」

を意味する。新中国初期までは甘肅省の一部であったが、1958年に分離し回族自治区になった。「一級行政区」としては小さい。ここでも都市人口は50%に達したが、漢族は都市部に多い。

夏の気温は30度を越すが、風は爽やかである。中心都市の銀川がある寧夏平原は、海拔1200mの高原、年間降水量200mmの乾燥地だが、初夏には雨が降る。「軽井沢のようだ」がわれわれ一行の感想だった。羊や野菜にとってもリゾート地の快適さに違いない。のびのびと育つ。「塞上の江南」といわれるゆえんである。

農業に占める牧畜業の比率は29%と高い。古来、放牧が多かったが、草原の緑を回復させるため、現在は畜舎飼育をしなければならぬ。羊はおいしい食べ物

である。「美しい」という字、「善」という字の元になっているように、人類発祥以来の深い付き合いだ。

水資源が決定的

寧夏は甘肅、内蒙古、陝西の各省・自治区に囲まれ、北部はトンガリ沙漠・マウス沙漠が迫ってきている中国の西部の乾燥地だが、黄河が貫いて流れているおかげで、その恩恵を多大に受けている。寧夏に流れ来る黄河の流量は年間325億立米、寧夏が利用できる分はそのうちの36億立米とされている。しかし、寧夏内の支流や地下水を含め年間約70億立米を引水しているといわれる。

高地に開いた農地のため高低差最大300mまでポンプ揚水し、新農業開発区

には縦横に水路が走っている（水は有料だが）。河川水を合理的に、公平に分配するというのが国の政策であるが、下流の人々は上流に不満を持っているようである。

桑の葉を飼料に

JICA―善隣プロジェクト

多くの桑畑や羊舎を訪ねた。桑の葉は柔らかい緑で、タンパクが多く、小枝も羊のエサになる。年に3回枝ごと刈っても枯れない稀なる丈夫な樹木が桑の樹である。

「東桑西移」という言葉がある。江南の農村が近代化するのにもない、桑畑が東部から西部の内陸に移動し始めたことを言う。始まりは1990年代である。しかし、国際絹価格の低迷、不安定な上下変動によって養蚕が減り、じつは桑はあまり始めている。

桑は栄養豊かで家畜が好んで食べる。桑葉とコーンと混合すれば優れた濃厚飼料となるし、調製してペレットに加工すれば、冬場まで保存し、ワラや茎と共にやれば羊は喜ぶ。また大量に収穫出来る時期の桑の葉や茎をコーンの実や茎と裁断して混ぜ、発酵庫でサイレージにすれ



ば、冬季のエサになる。

この「寧夏地区桑栽培及びその飼料化とそれによる羊牛の飼育法の普及」プロジェクトは善隣が起案し、JICAの「草の根技術協力事業（パートナー型）」として採択された。2010年から3年間で4700万円のODA予算で開始した。日本の技術協力のもとで日中共同で

進められている。

シルク大国であった日本には桑の技術の蓄積があり、今年の指導にはつくばの研究や自治体農業系の研究者などに技術指導者として同行してもらった。

中国側は國務院の科学技術部が窓口で、地元の寧夏回族自治区の科学技術庁が実施役である。地元としても予算150万円を計上し、対外科技協力センターの好人物の朱万福処長、張萍女史が実に熱心に担当してくれている。当協会の八島継男理事は現地管理者として、寧夏科技庁の中に快適な事務室を持ち、年間数ヶ月間はここで執務する。

今回は北京の科学技術部交流中心から、日本処の柏燕秋さんが現地に同行した。昨年まで7年間、日本で勤務（科技部系統の研修生管理など）した方で、今回の見学や清真（回族）料理の会食の際などで深くお話しできた。北京JICAからは、王莉女史が同行した。

農村変化の底流、身をもって体験

現地の農牧民に桑の飼料化を普及するについては、地元科技庁の朱処長もわれ

われも当初に描いたイメージは単純すぎたようだ。村役場が推薦し農家リーダーたちが旗振り役となれば、農家が共同して新飼料を取り入れるだろうという構図をイメージしていた。しかし、結局これは修正することになり、専業合作社、牧畜農民が協力相手となった。

昨年、ある村でこのプロジェクトを進める村当局と農民の間で意見対立が生じた。コーンの価格が上がったので、無料で支給される桑の苗でなくコーン畑にした、と農民が主張したのだ。

当局は引き下がり、到着した苗はそこでは植え付けられなかった。役人の力では、簡単には農民に及ばない、農民はそういうものである。農家の農地面積が狭いことも背景にある。

人民公社が解体し、個別経営ということになった農家は、無防備のまま市場経済の波の中で、農業の明日を求めることになった。かつての「原理主義的」に過ぎた共同化の時代は終わったが、個別経営から一步進んで、市場経済に即した何らかの「共同化」への動きが2000年以降に高まってきた。

「農民専業合作社法」が施行されたのは2007年のことである。農業を近代的な産業にしたい、経済的に合理的なもの

の、農民にとり自主的・民主的なものになりたい、というのは日本で唱えられている理想とも重なる。外地への出稼ぎによる農地委託が広まったのも一つの背景である。専業合作社は寧夏でも静かに広がりつつあり、現在は2333社にもなった。

養羊、養牛専業合作社が我々の相手だが、他に野菜、養魚から始まり、販売・資材購入（農協的）、農業機械作業を共同化、農業関係情報提供といった分野まで、専業を目的とする合作社がある。企業としての農業経営も進みつつあることも、分かった。中国の農村の変化を身をもって体験した感がある。

魅力ある農村の現場リーダーたち

ここで当プロジェクトの桑飼料普及の各地センターを担う技術・人望のある人々を紹介したい。9月には現地から4人のリーダーが来日し、当協会に来訪する。

■ハリキリ緑化社長の徐宏波さん

銀川市郊外の寧夏易林環境建設公司の中に設置された銀川桑飼料PR・管理センターを日本側は「銀川センター」と呼ぶ。

この徐宏波総経理は西北農業大学林業科卒の民間企業のハリキリ経営者である。年のころは五十がらみ、胸板の厚い恰幅のいいおじさんである。2009年に善隣旅行団が寧夏を視察した時は、善隣の酒豪相手にカンペイを続けた彼を記憶している方もいると思う。

徐総経理は、かつて寧夏自治区の商務庁の庁長をつとめ、今年80歳になる父親の三男で、広東省深圳とベルギーに兄がいる。夫人は寧夏大学学長の娘さん（その妹さんは日本留学中である）。

ここは徐さんが元の所有者から譲り受けた広大な桑の苗木の生産基地である。善隣プロジェクトの最大の基地として、羊舎改装や設備購入などに日本側から400万円が投じられた。公司としては結局1000万円の支出となった由である。

羊165頭の畜舎建設を終え、昨年10月から当プロジェクト資金で子羊を飼いはじめ、その子羊も生まれて増えていた。桑と茎付きコーン50%混合の発酵飼料を作る大サイレージが完成していた。そのため茎の裁断機には、「日本JICA贈送設備」のシールが貼ってあった。同じく日本資金による桑の葉とコーン粒

の粉碎器、攪拌機、ペレット製造器も使われていた。

日本側から桑の種子代、工事費、管理費を支給している「育苗圃」は昨年は種まきが遅れて雨期を逃し、土壌水分の不足で生育が遅れたため、今年は大事をとって苗圃を半分にし、代わりに37万本の苗を急きょ助成して購入し、100ムー（7畝）の各地の桑園で植え付けることにした。

易林公司是社員53人、主力事業は苗木販売で、ほかに庭園工事、飼料草加工などにも手を広げている。新たな計画として、2000万円を投資して近郊の黄河沿岸の景勝地を広く入手し、ワイン用葡萄の栽培・醸造と観光ワイナリーを来年開業する予定である。新事業に大きい投資が続けられるのが私たちには不思議にも感じた。

■敬愛される農民リーダー馬英貴さん

靈武市郊外の靈武市緑色源林牧專業合作社のリーダー、馬英貴さんは63歳。細かいあごひげを長く伸ばした作業衣姿で、一見して回族と分かる。したがって酒も煙草もやらず、仙人を思わせる風貌の好々爺である。

ところが実はこの人、理論と実践に優

れ、農民をまとめて、農牧業の合作社を立ち上げて、村人から如何にも信頼を受けていることは一見して了解できた。

靈武市崇興鎮園林場合作社は、これまですばらしい実績をあげてきたが、昨年、新規発足させた緑色源林牧專業合作社の農地は砂地質の高い丘陵の斜面で、もとは荒地地である。

300mも下にある湿地の湖水からポンプアップして丘の上の大型水槽に貯水し、水の問題を解決しているのには感心した。この水槽から灌漑でき、点滴灌漑も行える。桑樹の苗が、有機肥料（羊糞、鶏糞、化肥、ムー当たり8〜10kg）も十分に下に敷いて実に丁寧に植えられていたのが、他の農場との違い、印象的であった。追肥もしますと言っていた。リーダーを信頼する人の和を感じた。トウモロコシ、野菜もあったが、果樹もある。

馬さんは細長ナツメの改良や育成法で全国一の評価を得、地元の農民達に一心に尽くすことでも有名人である。ここでは桑の苗の樹間にナツメを植えていた。乾燥期には野兔が荒らしに来自る問題があるという。この馬英貴さんのなまりはすごい。中国語が堪能なさすがの八島理事も聞き取れない、と笑っていた。



(トウモロコシ、桑葉の裁断機)

馬英貴さんは9月に来日する。善隣の歓迎会で再会するのが楽しみである。

賀蘭山清真肉羊產業集團有限公司の良種繁育センターは銀川から40km、優良な羊の種を広めるセンターである。羊舎には3600頭の羊がいて、年間4000

頭を出荷する。世界から羊の優良種を輸入して改良に用いている。和牛の飼育も始めている。日本側専門家として同行した千葉県の専門家の坂本昌夫さんは、この畜牧技術センターの大きさ、そして施設のレベルについて、かなりなものと感心していた。

1949年の建国後、寧夏は開墾による農地拡大が図られた。現地政府の農墾部という部局が今の農墾企業集団となり、それに属する技術センターがこの公司である。農墾企業集団という大きい傘の下に沙湖実業公司というのがあり、またその下に清真公司がある。農墾系の企業群は全てが、企業としての採算経営が義務づけられているが、施設・人材・信用に恵まれているため、業績は順調である。

管下の農地は4,000平方kmもある(耕地1,300平方km、あとは湿地、荒地)。日本のコシヒカリも作っている。アルカリ性土壌(PHは8.5)だが対処はできるとのこと。

現場に詳しい日焼けした李如冲經理・畜牧師は、60歳くらいと思われるが、中肉中背の身体は筋肉質で、桑の根を掘らせたなら誰にも負けないという。その日の昼食のため、朝9時に絞めた羊をごちそ

うしてくれた。一味違う骨付シャブシャブであった。

農墾企業集団は旧農墾部の事業を企業化して全体管理する本部にあたる組織で、楊新軍総經理がその任に当たっている。本部の下に3本柱で寧夏北部を受け持つのが沙湖実業公司。その書記(副総經理兼務)の36才の馬文礼党書記も参加して昼食パーティーとなった。

馬書記はやや小柄の一見カチカチの党官僚ふうのインテリだが、なかなかの美声でカラオケ好き。昼からテレサテン、北国の春などを合唱で付き合わされた。台湾で出来た「ノルウェイの森」という歌が大好きだという。また、村上春樹の小説を愛読するとも。

彼はイスラムであり、「ここでは白酒(強い蒸溜酒)を飲むが、家では決して飲まない」と言う。彼を「半分イスラム」だと説明する人がいた。寧夏大学の修士卒だが、農民の子で、高校時代、彼自身で羊を飼い、それを売った金で大学入学を果たせたと言っていた。祖父が解放军の軍人であったとも聞いた。

■紅寺堡の天源農牧業科技開発公司総經理の冠啓芳女史

紅寺堡地区は、無人の黄土草原に黄河

の水を揚水し、貧困地区から20万人を移民させようという農業開発区である。道路や水路、耕地区画、住宅区とインフラはよくできている。開発区としては成功事例である。

開発区に設立した天源公司は、飼育場として67畝の土地を得て、4000㎡の広い畜舎で、3000頭の羊を飼っている。肉羊を出荷し、農家に母羊を売り、人工授精も行う。近く牛の飼育も始めるという。4500円で売れる豪州のサファカ種を出荷している。

冠啓芳女史は50歳、ふっくらした優しいお母さんタイプ。ご主人の牛文智さんは寧夏開発区畜牧工作站的の研究员、当地区を受け持つ科学技術特派員でもある。家畜飼育の専門家であるご主人がともに公司を支えているわけである。冠女史自身も獣医師の資格を持ち、銀川で診療所を開きつつ、ここ紅寺堡に投資した。

天源公司が当プロジェクトの一環として植えたばかりの広い桑畑を見学した。植え付けは、一斉に条件をそろえて植えるのでかなり大変だが、桑畠は更に拡張する予定だという。ここ紅寺堡では、地下水は地下30mとの話であった。量的制約はあるが、しかし水問題はどこまでいっても難しい。